

日米大学生の比較研究 (2)

— 父親・母親に対する日米大学生の認知・態度の変化 —

本田時雄・ヨシミツ タケイ・白井三香子・大熊保彦

A Cross-Cultural Study in Japanese and American Adolescents II

— Changes in Cognition and Attitude of University
Students toward Their Fathers and Mothers —

Tokio Honda, Yoshimitsu Takei, Mikako Shirai, Yasuhiko Okuma

Authors intended to have mutual understanding between Japanese and American people, in the same way as in the previous article. The aim of this article is to clarify similarities and differences between Japanese and American adolescents cognition and attitude toward their parents in the process of development by analysing their responses to questions: (1) Did you change your cognition or not? (2) When did it change (your age)? (3) Why did it change? (4) How did it change?

We coded or recoded the data and applied chi-square test to them.

Respondents were the same as in the previous report—347 (136 males and 211 females) students in Japan and 310 (81 and 229) in America.

Distinguished results were as follows;

- 1) Change or not of student cognition and/or attitude toward their parents: about half of American adolescents changed their cognition toward Fathers more than once while the same number of Japanese did not.
- 2) When: age 15~25, especially about 18 was the most frequent among all groups.
- 3) Why: the developmental reasons (triggers) and reasons about "Self" in American students were twice more than in Japanese ones.
- 4) How: the difference between Japanese and American students about their mothers were significantly large. Generally positive changes were the most frequent and negative ones were the least.

はじめに

発達過程において、子が親に対して、逆に親が子に対してどのように認知・態度を変化させていくかということは、自己に対するそれと同様にきわめて重要である。自己に対する認知・態度に関する研究は多いが（例えば都筑学 1991, 西岡薫・無藤隆 1990, a, b. Clausen, J. 1987), 親子相互の認知・態度の変化を探究した研究は皆無と思われる。

そこで今回は、予備的研究として子の親に対する認知・態度の変化に焦点を当てて調査をおこなった。

方 法

1. 調査項目

父母に対する大学生の認知・態度の変化について、日本とアメリカの2か国でアンケート調査を実施した。質問の仕方は下表のとおりである。

- I. あなたは子供のころから今までに、父親についての見方が変化したことがありましたか。
- (a) はい、変わりました（1回）
(b) はい、変わりました（2回以上）
(c) いいえ
- II. もし変わった場合、それはいつ、なぜ、どのように変わりましたか。
- (a) いつ変わりましたか（その時のあなたの年齢）
① 歳 ② 歳
- (b) なぜ変わったのですか（理由）
①
②
- (c) どのように変わりましたか。
①
②
- （母親について……以下同文）

2. 回答者

回答者は、前回の報告（「日米大学生の比

較研究(1)」本田ほか, 1990) に述べたものと同一である。すなわちアメリカのグループは Penn. State Univ. で、教育学を主専攻または副専攻している男子81名、女子229名（合計310名）の学部学生である。日本は、著者らの勤務する文教大学の教育学部および人間科学部の学部学生、男子136名、女子211名（合計347名）である。調査は授業中に実施され、授業終了時に回収された。実施の期間はアメリカは1989年11月、日本は1990年5月である。

3. 結果の処理

変化の有無や変化のあった時の年齢に関しては、回答のままコーディングした。その際、大学入学に関して、日米の慣習の差が問題となった。つまり日本では大学入学時に親元を離れる場合とそうでない場合があるが、アメリカではほとんどの新生は親元を離れて入学する。また「High School」は「junior」と「senior」とに分かれている場合（その場合でも3年+3年、2年+4年がある）と分かれていない場合があり、日本の学制とは異なるので、Table 2のように離家・大学入学などを中心にコーディングした。

変化の生じた理由（契機）は、アメリカの回答者はまずTakeiがコーディングし、コーディング・マニュアルを作製した。次いで、本田らが日本の回答をコーディングし、Takeiが新しいマニュアル（約100項目）を作製した。それに基づいてTakeiと本田が討議し、最終的に日米の回答をコーディングした。さらにTable 4のように6カテゴリー（3つの大カテゴリー）に分類し直した。

どのように変化したかに関しては、契機と同様な手順で、コーディング・マニュアルを作製し、さらにそれに基づいて回答をコーディングした。さらにTable 5のように4カテゴリーに分類し直した。

A) 単純集計：前述の質問項目それぞれに①日米2国間；②父親（FA）と母親（MO）、別に③男子回答者さらに④女子回答者⑤性差に関して、カイ二乗検定を行った。

B) クロス集計：質問項目を要因とし、クロス集計を行って、カイ二乗検定を行った。

結 果

■ 単純集計

I. 変化の有無；

1. 全 体：

A) Table 1に見られるように、父親 (FA) 及び母親 (MO) に関するカイ二乗検定の結果はいずれも 1%水準で有意であった。すなわちFAではアメリカが「2回以上」が最多 (48%)、次いで「変化無し」(31.3%)であるのに対して日本では「変化無し」が最多 (48.2%)、次いで「1回」(27.7%)、「2回以上」(24.1%)と続いた ($\chi^2 = 42.208$, $df = 2$, $p < 0.01$)。MOでは、日本は同様な傾向を示したが(ただし「変化無し」が67.6%と過半数を占めた)、アメリカは「変化無し」が最多 (50.3%)で、「2回以上」(27.2%)と続いた ($\chi^2 = 32.88$, $df = 2$, $p < 0.01$)。

B) 同一国内でのFAとMOの関係に関しても、カイ二乗検定の結果はともに有意な差があった。アメリカでは最多がFAの「2回以上」でMOは「変化無し」であった ($\chi^2 = 33.495$, $df = 2$)。日本ではFA、MOとも傾向は類似していたが、MOで最多と最少の差が50%以上もあった。 ($\chi^2 = 30.757$, $df = 2$, $p < 0.01$)。

2. 男 子：

A) カイ二乗検定の結果、1%水準で有意に大であったのはFAだけで、MOは有意でなかった。つまりFAに関してアメリカでは「2回以上」が最多 (46.1%)で、最少が「1回」(18.4%)であったが、日本では最多が「変化無し」(41.8%)、最少が「2回以上」であった ($\chi^2 = 8.799$, $df = 2$, $p < 0.01$)。

B) アメリカでは、最多がFAで「2回以上」、MOで「変化無し」であり、最少はともに「1回」であった ($\chi^2 = 14.818$, $df = 2$, $p < 0.01$)。日本ではFA、MOがともに類似した傾向を示し、「変化無し」が最多、「2回以上」が最少であった ($\chi^2 = 33.187$, $df = 2$, $p < 0.01$)。

3. 女 子：

A) 全体と同様な傾向であり、検定の結果はいずれも 1%水準で有意な差がみられた。すなわちFAに関して、アメリカでの最多は「2回以上」(49.3%)で、最少は「1回」(20.8%)であった。これに対し日本は最多が「変化無し」(52.4%)で、最少が「2回以上」(22.3%)であった ($\chi^2 = 36.342$, $df = 2$)。他方MOに関しては最多は両国とも「変化無し」(46.1%, 61.9%)であったが、最少はアメリカが「1回」(24.1%)、日本が「2回以上」(19.5%)であった ($\chi^2 = 26.039$, $df = 2$, $p < 0.01$)。

またアメリカでのFAとMOの関連については、最多は前者の「2回以上」、後者の「変化無し」で、最少はともに「1回」であった ($\chi^2 = 20.363$, $df = 2$)。日本では、FA、MOともに最多は「変化無し」、最少は「2回以上」であったが、 $\chi^2 = 10.794$ ($df = 2$, $p < 0.01$)で有意に大であった。

4. 男女差に関して検定した結果、日本でMOのみが 1%水準で有意な差を示した ($\chi^2 = 11.618$, $df = 2$, $p < 0.01$)。

II. 変化の時期；

A) 年齢：最も早い時期はアメリカの女子でMOに対して、また日本の男子でFAに対して、5歳以下と回答した者が一人ずついた。表2のように、学齢で分類してみると、あらゆる組み合わせでのカイ二乗検定の結果は有意でなかった。しかしTable 3のような形にまとめ、これにカイ二乗検定を適用したところ、次のような結果が得られた：

日米比較でFAの全体、男子及び女子、MOの全体と女子はいずれも 1%水準で有意な差がみられた。なおアメリカでは大学入学と同時に家を離れて大学の寮に入ることが一般的であり、両者を分離できないので、日本の場合も離家を大学入学に合計して検定を行ったが、それでも結果に変化は認められなかった。

III. 変化の理由；

どのような契機で親に対する認知・態度が

変化したかについて、(1)発達の、(2)偶発的および(3)その他の3つに大別した。前2者は回答者自身に関するものと親に関するものとに分類できる。例えば自分自身に関する発達の契機としては「入学、卒業、入試失敗」など、親に関する発達の契機は「定年・老化・死亡」などである。また自分自身に関する偶発的契機は「下宿、一人暮らし、病気、怪我」などで、親に関する偶発的契機としては「離婚、再婚、倒産、転職」などである。Table 4に示すように、いずれの場合も発達の契機が最多で、「その他」の契機（アメリカ男子青年のFA以外）が最少であった。そこでカイ二乗検定を行った。

1. 全体：FAに関して、両国とも発達の—偶発的—その他の順で減少傾向が見られるが、アメリカの発達の契機の頻度が日本よりも2倍弱大で、偶発的契機では逆に日本の方が多かった($\chi^2 = 7.905$, $df = 2$, $p < 0.005$)。

MOに関しては、10%水準で有意な傾向が見られた。すなわちFAと同様発達の契機はアメリカが2倍以上も多く、「その他」の契機は同数であった。

契機を自己に関するものと「その他」に分けた下位分析では、FAは1%水準($\chi^2 = 22.641$, $df = 5$)。MOは5%水準($\chi^2 = 11.97$, $df = 5$)で有意な差がみられた。いずれの場合も、発達の契機では「自己」が、その他の契機では「親の行動」が極めて多かった。

2. 男子：FAでは有意な差がみられたが($p < 0.05$)、MOは有意でなかった。前者は発達の契機以外、日本の方が非常に多く（特に偶発的契機の頻度は3倍以上もあった）、下位分析では、FAだけが5%水準で有意だった。すなわち自己の発達の契機以外日本男子の頻度が大きであった。

FAとMOの比較では、自己のその他の契機が度数0であったが、5%水準で有意な差がみられた($\chi^2 = 10.835$, $df = 4$, $P < 0.05$)。AFで多かったのは自己の発達の契機（約2.5倍）、自己の偶発的契機（1.5倍）および親のその他の契機であった。

3. 女子：FAに関しては有意でなかったが、MOは5%水準で有意な差があった。これはアメリカ女子の発達の契機が日本の約3倍も多いことによるものと考えられる。

下位分析では、FA、MOともに1%および5%水準で有意に大であった。FAで親の発達の契機が日米同数以外、FA、MOともにアメリカが多かった。特に自己の発達の契機および親の偶発的契機は日米の差がきわめて大きかった。

4. 性差：男女間で有意な差が見られたのは日本のFAに関してであった。他の3つのマトリックスでは男子の頻度が女子より多いことはないが、日本のFAは親の偶発的契機および自己のその他の契機の頻度に関して、男子が女子を上回っていた。

IV. 変化の様相；

親に対する認知・態度の変化をポジティブ・ニュートラル・ネガティブの3つおよび親との関係に分類して、分析した。

1. 全体：一般的に「ポジティブ」が「ネガティブ」よりも多かった。FAでは10%水準で有意な傾向が認められた。自己の認知・態度の変化は「親」に関するものが圧倒的に多く、次いでネガティブな変化では「夫（妻）」、他の変化では「人間（大人・先輩・社会人）」が挙げられていた。MOに関して日米間で有意な結果が得られた($\chi^2 = 8.060$, $df = 3$, $p < 0.005$)。いずれの下位カテゴリーでもアメリカ > 日本であったが、特に親との関係の変化（34.2%：18.1%、中でもプラスの変化は15.1%：3.7%）の差が大であった。

2. 男子：やはりMOで10%水準で有意な傾向が認められた($\chi^2 = 6.497$, $p < 0.10$)。すなわちアメリカ男子はニュートラルな認知・態度の変化では多かったが、他の変化はすべて日本男子が上回っていた。また同一国内でのFAとMOの比較ではアメリカが1%水準で有意であった($\chi^2 = 12.281$, $df = 3$, $p < 0.01$)。ニュートラルな変化以外すべてのFAの頻度が大きであった（特に親との関係の変化は5倍強）。

3. 女子：日米比較では1%，アメリカでのFA-MO比較では5%水準で有意であった。前者では、ニュートラルな認知・態度の変化以外アメリカの方が多かった。後者は関係の変化以外FAの頻度が大きであった。

4. 性差：アメリカでのMOに関して1%水準で有意な結果が得られた。すなわちニュートラル以外のカテゴリーでも女性が多かったが、男女は、反比例の傾向を示した。

考 察

変化の理由：

親に関する認知・態度の変化をTURNING POINT (転換点)として捉えると、変化の理由を問うことはLIFE EVENTSと関係してくる。

(LIFE EVENTSの分類は幾人かの先人が試みている。例えばClausen, J. 1988, 都筑学1990)。

カイ二乗検定を適用したところ、有意に大きな結果が認められたのは、日米比較でFAの全体と男子(下位分析で女子のみ)、MOの全体と女子であった。いずれの場合もアメリカ青年は発達の契機が60%以上の高率で、偶発的契機が約1/4以下であるのに対して、日本青年は発達の契機は50%以下で、偶発的契機と大差なかった。これらを細かく見ると「離家」と「大学入学」に関する認識の違いに起因すると考えられる。前にも触れたように日本青年にとって離家はかなり重要な意味を持っているが、アメリカ青年にとってはそれほど重要ではない。「離家」と「入学」がしばしば同時に生起する出来事であったとしてもアメリカ青年は「大学入学」の側面を、日本青年は「離家」の側面を強調するようである。特に日本女子青年の場合、親元を離れた時、母親(そして父親)の有り難さを感じるらしい。

アメリカ男子青年は、両親に対して共通に発達の契機から態度や認知の変化を最も多く感じており、次いで父親には親のポジティブな行動を、母親には親の職業上の変化を挙げていた。回答者の性差が見られたのは、FAに対す

る日本青年のみであった。女子の発達の契機が5割以上で極めて多く、その他の契機が1割強であるのに対して、男子は3つの契機間に大きな差が見られなかった。

変化の様相：

日米間で有意な結果が得られたのはFAに対する全体とMOに対する全体、男子および女子であった。FAに関するアメリカ青年の最多の最少の差(ポジティブの39.7%-ネガティブの11.6%)は、日本青年のそれ(ニュートラルの36.4%-ネガティブの14.6%)に比較して小さかった。

同一国内での有意な差が得られたのはアメリカだけであった。FA-MOに関する男子と女子であった。男子では最多がFAで「ポジティブ」の45%、MOで「ニュートラル」の64%であった。「ネガティブ」はともに最少であった。女子では最多がFAで「ポジティブ」の37%、MOで「親との関係」の40%であった。

男女差が認められたのはアメリカでのMOに関してだけだった。最多は男子の「ニュートラル」(64%)で、女子は「ポジティブ」(37%)であり、最少はともに「親との関係」であった。

日本男子は女子よりも両親に対して「ポジティブ」な変化を多く挙げていた。アメリカ青年では、男子が父親に対して「ポジティブ」な変化を、女子が母親に対して「ポジティブ」な変化を多くしていた。

また「親との関係」に関する回答は、全般にアメリカ青年の方が多かったが、性別では女性の方が特に母親に対して2倍以上多かった。

■クロス集計

結果と考察

次いで、WHEN(年齢)、FA(MO)、CE(時期)、WHY(契機)およびHOW(結末)の要因の関係を国別で父親と母親ごとに、さらに男女別にクロス集計し、カイ二乗検定をおこ

なって、以下のような結果が得られた。

1) 日本:

A) FAに対して; WHYとCE (大学入学を中心に考えた時期) ($\chi^2 = 129.916$, $df = 80$) およびHOW ($\chi^2 = 184.852$, $df = 45$) がいずれも1%水準で有意であった。すなわち、契機は「自己の発達の」が約半数、「自己の偶発的」約1/4で、いずれも全てのセルを埋めていた。時期は大学入学時に限定されず、13~17歳が40%、18歳以上が20%であった。結末は「ポジティブ」および「ニュートラル」がともに約1/3であった。つまり一貫して「自己の発達の」契機によって大学入学以前に親に対する認知・態度の変化が生じ、その変化は「ポジティブ」「ニュートラル」であった。

性別でみると、女性がWHY×CEで1%水準 ($\chi^2 = 88.644$, $df = 56$)、男性がWHY×HOWで有意であった。男女に共通したWHYはいずれも「自己の発達の契機」が最多で(女: 50.7%, 男: 35.2%), 時期は13~17歳44.3%, 結末は「ポジティブ」が約半数弱、続いて「ニュートラル」が1/4強だった。すなわち契機に関して「自己の発達の契機」が男女とも最多であるが、女性は大学入学前に変化し、男性は「ポジティブ」な結末に達していた。

B) MOに対して: WHYとCEおよびHOWがともに1%水準で有意であった ($\chi^2 = 115.98$, $df = 63$; $\chi^2 = 200.74$, $df = 63$)。すなわち契機は「自己の発達の契機」が43.3%で最多で(離家以外すべてのセルに分布)、次いで「自己の偶発的契機」が24.4%であった。時期に関しては、13~17歳が43.3% (すべてのセルに分布) で、次いで18歳以上と離家が18.9%、17.8%と続いており、離家が父親に対するよりも多かった。結末に関しては「ポジティブ」が36.5% (すべてのセルに分布)、「ニュートラル」が32.9%であった。

性別で見ると、女性の場合契機と時期および結末に有意に大きい連関が見られ(ともに $p < 0.0001$)、契機に関しては1位が「自己の発達の契機」(39.7%)、2位が「自己の偶発的契機」(26.5%)次いで「親の偶発的契機」

(14.7%)が続いており、親によって動かされている日本女性像が窺える。時期は1位は全体と同じく13~17歳であったが(41.2%)、2位は離家(22.1%)で入学はわずか8.8%でしかなかった。結末に関しては「ポジティブ」および「ニュートラル」がともに35.9%で、後者はすべてのセルに分布していたが前者は「自己の発達の契機」のセルに集中していた(56.5%)。

男性の場合、契機と結末の連関が5%水準で有意に大であり、「ポジティブ」(38.1%)と「ニュートラル」(23.8%)が多かった。

2) アメリカ:

A) FAに対して: 結末と年齢 ($\chi^2 = 56.120$, $df = 36$, $p < 0.0175$) および契機 ($\chi^2 = 69.832$, $df = 32$, $p < 0.001$) であった。結末は1位が「ポジティブ」(37.6%)で2位、3位が「ニュートラル」(25.4%)、「関係の変化」(23.4%)と接近しており、4位は「ネガティブ」(11.7%)であった。年齢に関しては1位は18~25歳の大学時代(42.1%)で、2位、3位は15~17歳の高校時代(25.9%)と12~14歳の中学校時代(22.3%)であった(2位と3位はすべてのセルに分布)。契機に関しては「自己の発達の契機」が60.6%と圧倒的に多く、すべてのセルに分布していた。

男女ごとの分析では、女性が結末と年齢および契機がともに1%水準で有意な差がみられた。前者に関しては全体の分析と酷似していた。すなわち「ポジティブ」(35.3%)「ニュートラル」(26.1%)「関係の変化」(23.5%)が1~3位を占めており、年齢に関しても1~3位までは大学時代(41.2%)、高校時代(26.8%)、中学時代(23.5%)であった。いずれもすべてのセルに分布していた。

B) MOに対して: 契機と結末のクロス集計が1%レベルで有意に大だった、($\chi^2 = 61.902$, $df = 36$)。契機は最多が「自己の発達の契機」(56.2%)、2位は「自己の発達の契機」「親の偶発的契機」で13.0%だった。いずれもすべてのセルに分布していた。結末に関しては「関係の変化」が最も多く(34.2%ですべてのセルに

分布), 次いで「ポジティブ」(32.2%)「ニュートラル」(21.9%)と続いていた。

女性は年齢と契機(1%水準)および結末(5%水準)が有意な差を示した。年齢は大学時代が43.2%, 高校時代が29.7%, 中学時代が16.9%, 契機は「自己の発達の契機」が59.3%, 「自己の偶発的契機」が13.6%, 「親の偶発的契機」が11.0%。結末は「関係の変化」の40.2%, 「ポジティブ」が32.5%であった。男性の結末と時期のクロス集計は有意な差が見られた($\chi^2=28.830$, $df=16$, $p=0.0251$)すなわち「自己の発達の契機」が60.9%で圧倒的に多く, 時期は13~17歳が39.1%, 18歳以上が26.1%, 大学入学が21.7%だった。

なお現在, 大学生および女子高校生とその両親に, 「自己」「親」「子ども」に対する認知・態度の変化に関するアンケート調査に協力してもらい, そのデータを解析中である。

文 献

Clausen, J (1988) アメリカ合衆国における Life CourseとTransitionについて 1988年10月7日, 早稲田大学文学部における講演会
本田時雄・Yoshimitsu Takei・白井三香子(19

91) 子どもに対する日本・アメリカ青年の認知・態度に関する交差文化的研究 人間科学研究第13号

森岡清美・青井和夫(編)(1987) 現代日本人のライフコース 日本学術振興会

西岡薫・無藤隆(1990-a) 同一性地位における自伝的記憶の働き 日本発達心理学会第1回大会発表論文集

西岡薫・無藤隆(1990-b) 同一性地位における自伝的記憶の働きⅡ 日本教育心理学会第32回大会発表論文集

Orville G, Brim, Jr. and Carol D, Ryff (1980) On the Properties of Life Events in Paul B. Baltes and Orville G. Brim, Jr. (Eds) Life-Span Development and Behavior Vol.3 Academic Press

千石 保ほか(1992) 日本の若者・アメリカの若者 日本放送出版協会

Steven J, Denish, Michael A. Smyer, and Carol A. Nowak (1980) Developmental Intervention: Enchancing Life-Event Processes in Paul B. Baltes and Orville G. Brim, Jr. (Eds) Life-Span Development and Behavior vol. 3 Academic Press

都筑学(1992) 生涯発達とライフイベント 日本発達心理学第3回大会 発表論文集

Table 1

	Change or not	A. All	A. Male	A. Femal	J. All	J. Male	J. Femal
FA	once	62	14	48	94	42	52
	more than once	149	35	114	82	36	46
	no change	96	27	69	164	56	108
MO	once	73	14	59	74	16	58
	more than once	88	15	73	37	15	22
	no change	163	50	113	231	101	130

Table 2

	When (1)	A. All	A. Male	A. Femal	J. All	J. Male	J. Femal
FA	~ 11	8	3	5	14	9	5
	12 ~ 14	46	8	36	27	7	20
	15 ~ 17	52	9	43	49	22	27
	18 ~ 25	85	22	63	71	34	37
	~ 30	1		1			
MO	~ 11	8	0	0	1	0	1
	12 ~ 14	25	3	22	16	2	14
	15 ~ 17	44	9	35	34	10	24
	18 ~ 25	60	9	51	45	9	36
	~ 30	2	1	1			

Table 3

	When (2)	A. All	A. Male	A. Femal	J. All	J. Male	J. Femal
FAB	College Enrollment	66	16	50	14	5	9
	A Little Earlier Teenage (13~17)	73	14	58	62	23	39
	Pre-Teenage (~12)	13	1	12	9	6	3
	A Year or More After College Enrollment	27	9	18	34	18	16
	A Little After Leaving Home				23	7	16
	Before College Enrollment	3	0	3	4	2	2
	Both Before & After College Enrollment	12	2	10	10	7	3
MOB	College Enrollment	47	5	42	8	1	7
	A Little Earlier Teenage (13~17)	56	10	46	44	11	33
	Pre-Teenage (~12)	8	1	7	4	2	2
	A Year or More After College Enrollment	22	6	16	17	5	12
	A Little After Leaving Home				16	1	15
	Before College Enrollment	2		2	3		3
	Both Before & After College Enrollment	5		5	3	2	1

Table 4

	WHY	FA						MO					
		American			Japan			American			Japan		
		All	Male	Female	All	Male	Female	All	Male	Female	All	Male	Female
I	Develop. Triggers	112 (64.0)	24 (63.2)	88 (64.2)	62 (48.1)	20 (37.0)	42 (56.0)	85 (63.9)	11 (57.9)	74 (64.9)	38 (48.7)	13 (61.9)	25 (43.9)
	Growth, Mature	91	21	70	46	16	30	57	8	49	28	8	20
	School Entrance	17	3	14	11	3	8	20	2	18	5	2	3
	Employment							1		1	1	1	
	Love affair							1		1			
	Child birth	1		1				2		2			
	subtotal	109 (62.3)	24 (63.2)	85 (62.0)	57 (44.2)	19 (35.2)	38 (50.7)	81 (60.9)	10 (52.6)	71 (62.3)	34 (43.6)	11 (52.4)	23 (40.4)
	P's retirement	1											
	P's getting old												
	P's death	2											
	subtotal	3 (1.7)											
II	Accidental Triggers	40 (22.9)	6 (15.8)	34 (24.8)	45 (34.9)	21 (38.9)	24 (32.0)	38 (28.6)	8 (42.1)	30 (26.3)	30 (38.5)	6 (28.6)	24 (42.1)
	Leaving home	12	3	9	24	7	17	13	1	12	15	3	12
	Illness, Injury	1		1	1	1		0			1		1
	Quarrel W/h P's	2		2	8	5	3	2	1	1	5	1	4
	Psychological, social Pro.							1		1			
	subtotal	15 (8.6)	3 (7.9)	12 (8.8)	33 (25.6)	13 (24.1)	20 (26.7)	16 (12.0)	2 (10.5)	14 (12.3)	21 (26.9)	4 (19.0)	17 (29.8)
	P's divorce	7	1	6	1	1		3		3	1		1
	P's remarriage	1		1	1	1							
	P's unemployment	2	1	1	0			1	1				
	P's job change, promote	1		1	1	1		8	4	4			
	P's illness, injury	1		1	6	4	2	2		2	5	1	4
	P's problematic B.	13	1	12	3	1	2	8	1	7	3	1	2
	subtotal	25 (14.3)	3 (7.9)	22 (16.1)	12 (9.3)	8 (14.8)	4 (5.3)	22 (16.5)	6 (31.6)	16 (14.0)	9 (11.5)	2 (9.5)	7 (12.3)
III	Other Triggers	23 (13.1)	8 (21.1)	15 (10.9)	22 (17.1)	13 (24.1)	9 (12.0)	10 (7.5)	0	10 (8.8)	10 (12.8)	2 (9.5)	8 (14.0)
	Negative events	1	0	1				1	0	1			
	Gradually	0	0	0	4	4	0						
	subtotal	1 (0.6)	0	1	4 (3.1)	4 (7.4)	0	1 (0.8)		1 (0.9)			
	P's positive behavior	19	6	13	15	9	6	8		8	8	1	7
	P's neutral behavior												
	P's negative behavior	3	2	1	3	0	3	1		1	2	1	1
	subtotal	22 (12.6)	8 (21.1)	14 (10.2)	18 (14.0)	9 (16.7)	9 (12.0)	9 (6.8)	0	9 (7.9)	10 (12.8)	2 (9.5)	8 (14.0)
	Grand total	175	38	137	129	54	75	133	19	114	77	20	57

※ Figure in paren thisis : %

Table 5

H O W	FA						MO					
	American			Japan			American			Japan		
	All	Male	Female	All	Male	Female	All	Male	Female	All	Male	Female
Neutral Changes in Cognition and Attitude As Parents	32 (16.1)	8 (18.6)	24 (15.4)	28 (18.5)	12 (18.8)	16 (18.4)	20 (13.7)	10 (45.5)	10 (8.1)	10 (12.0)	3 (15.8)	7 (10.9)
As Husband (Wife)			0							1 (1.2)		1 (1.6)
As Man (Woman)			0							1 (1.2)		1 (1.6)
As Human being (Adult, Senior, Social member)	17 (8.5)	1 (2.3)	16 (10.3)	22 (14.6)	5 (7.8)	17 (19.5)	13 (8.9)	4 (18.2)	9 (7.3)	17 (20.5)	2 (10.5)	15 (23.4)
As the Weak				1 ()	1 (1.6)							
Subtotal	49 (24.6)	9 (20.9)	40 (25.6)	51 (33.8)	18 (28.1)	33 (37.9)	33 (22.6)	14 (63.6)	19 (15.3)	29 (34.9)	5 (26.3)	24 (37.5)
Positive Changes in Cognition and Attitude As Parents	72 (36.2)	19 (44.2)	53 (34.0)	46 (30.5)	22 (34.4)	24 (27.6)	48 (32.9)	6 (27.3)	42 (33.9)	23 (27.7)	7 (36.8)	16 (25.0)
As Husband (Wife)												
As Man (Woman)												
As Human being (Adult, Senior, Social member)	7 (3.5)	2 (4.7)	5 (3.2)	1 (0.7)		1 (1.1)	3 (2.1)		3 (2.4)	4 (4.8)	1 (5.3)	3 (4.7)
As the Weak				8 (5.3)	6 (9.4)	2 (2.3)				4 (4.8)		4 (6.3)
Subtotal	79 (39.7)	21 (48.8)	58 (37.2)	55 (36.4)	28 (43.8)	27 (31.0)	51 (34.9)	6 (27.3)	45 (36.3)	31 (37.3)	8 (42.1)	23 (35.9)
Negative Changes in Cognition As Parents And Attitude	23 (11.6)	3 (7.0)	20 (12.8)	21 (13.9)	10 (15.6)	11 (12.6)	12 (8.2)	1 (4.5)	11 (8.9)	6 (7.3)	3 (15.8)	3 (4.7)
As Husband (Wife)												
As Man (Woman)				1 (0.7)		1 (1.1)						
As Human being (Adult, Senior, Social member)									2 (2.4)	1 (5.3)	1 (1.6)	
As the Weak												
Subtotal	23 (11.6)	3 (7.0)	20 (12.8)	22 (14.6)	10 (15.6)	12 (13.8)	12 (8.2)	1 (4.5)	11 (8.9)	8 (9.6)	4 (21.1)	4 (6.3)
Relation Changes	2 (1.0)	1 (2.3)	1 (0.6)	1 (0.7)	1 (1.6)					3 (3.6)		3 (4.7)
Positive Changes	22 (11.1)	4 (9.3)	18 (11.5)	16 (10.6)	4 (6.3)	12 (13.8)	22 (15.6)	1 (4.5)	21 (16.9)	3 (3.6)		3 (4.7)
Negative Changes	3 (1.5)	1 (2.3)	2 (1.3)	4 (2.6)	2 (3.1)	2 (2.3)	5 (3.4)		5 (4.0)	1 (1.2)		1 (1.6)
Equalization	21 (10.6)	4 (9.3)	17 (10.9)	2 (1.3)	1 (1.6)	1 (1.1)	23 (15.8)		23 (18.5)	8 (9.6)	2 (10.5)	6 (9.4)
Rupture												
Subtotal	48 (24.1)	10 (23.3)	38 (24.4)	23 (15.2)	8 (12.5)	15 (17.2)	50 (34.2)	1 (4.5)	49 (39.5)	15 (18.1)	2 (10.5)	13 (20.0)
Grand total	175	38	137	129	54	75	133	19	114	77	20	57

※ Figure in paren thesis : %